

## 我が教室における抗血友病濃縮製剤の使用状況

帝京大学医学部第一内科 安部 英  
木下 忠俊  
吉村 祐一  
柳 富子  
風間 睦美

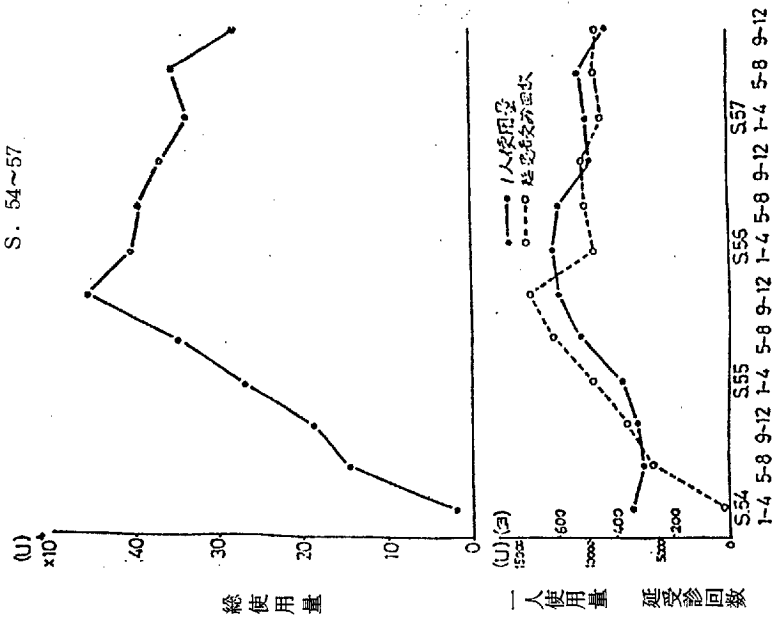
私達の教室では、昭和57年12月より家庭療法を開始致しました。家庭療法普及につれ、濃縮製剤総使用量、1人使用量、1回使用量、受診回数等がどのように変化するか比較のため昭和54-57年の過去4年間における外来・入院患者使用状況をまとめてみました。あわせて当院における各関節出血に対する投与量を表示しました。

各年月平均受診患者数は、Hemophilia A では昭和54年19人、55年38人、56年34人、57年33人でHemophilia Bでは、8人、9人、7人、6人です。昭和54年から55年にかけて第Ⅷ濃縮製剤の急激な使用量増加があり、Ⅸ後横ばいとなっています。これは昭和54年からこれまでのクリオレシピテートにかわり第Ⅷ濃縮製剤が使用しはじめられ使用時減った受診患者数が月とともに増加し、受診患者・延受診患者数に比例して総使用量も増加したと思われます。これに対し1人使用量では、特に目立った変化はなく、ほぼ横ばいです。

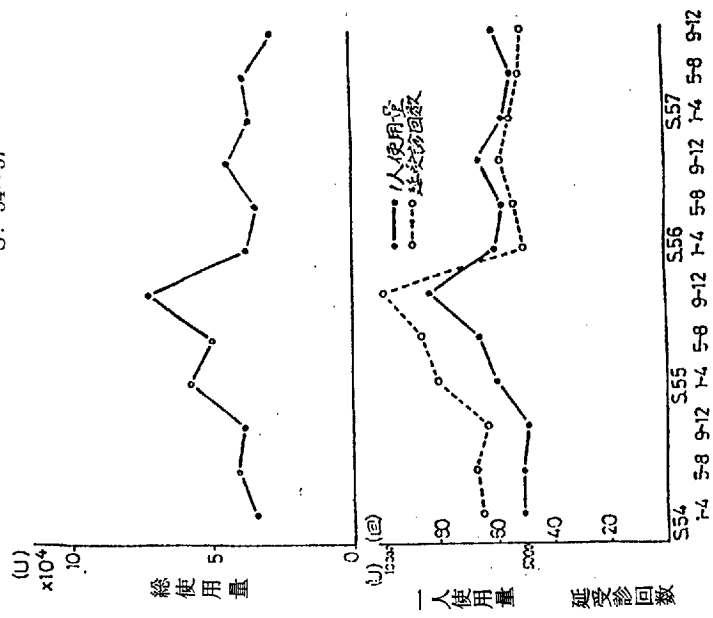
第Ⅸ濃縮製剤は、すでに昭和52年より使用しはじめられているので受診患者数は横ばいで総使用量も横ばいです。

入院患者における製剤使用状況では、昭和54年55年に比べ56年57年で著明な減少を示しています。これは口腔外科、整形外科の手術による入院に比べ、出血による内科入院が減少したためと思われる。かわりに最近では、感染症による内科入院の増加が目立ちます。各関節出血に対する投与量は、全国平均～若干高めですが、このdoses決定は必ずしも医師の主導によるものではなく（患者の希望による時もある）、今後検討を重ねて行く予定です。

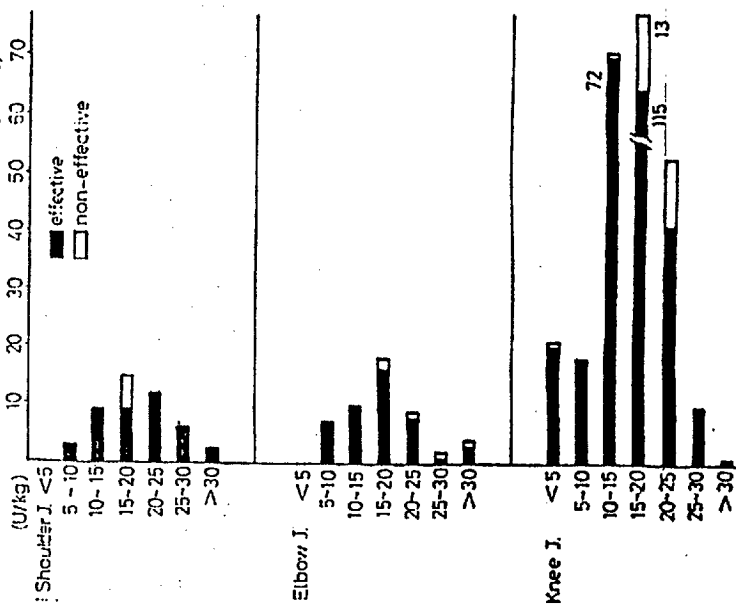
外来患者のF.Ⅷ製剤使用状況  
S. 54~57



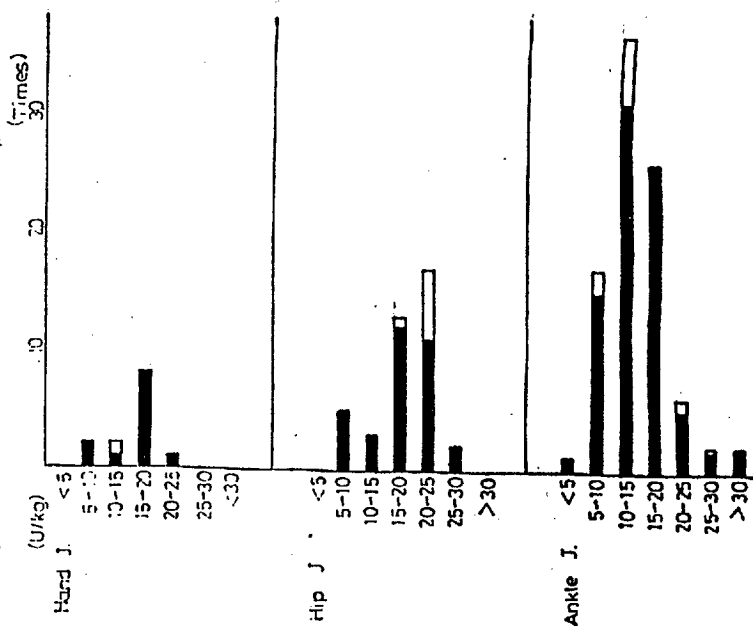
外来患者のF.Ⅸ製剤使用状況  
S. 54~57



# 1. Doses of Administration: Hemophilia A

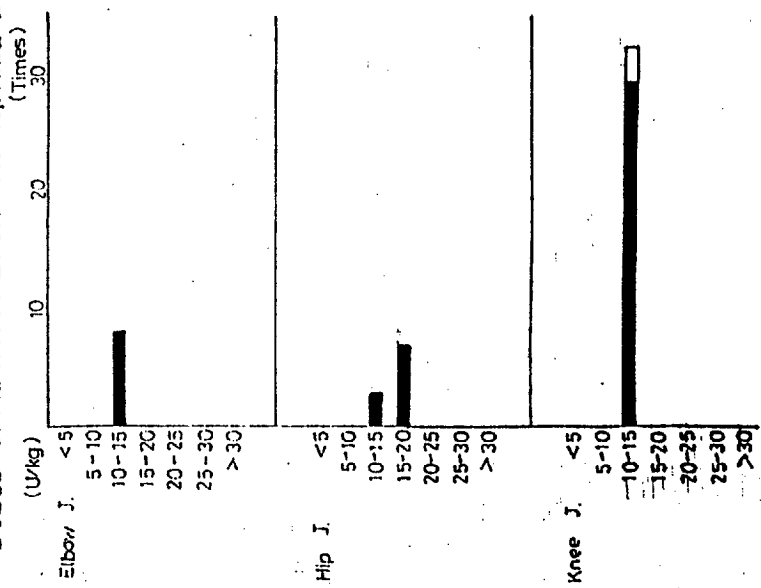


# 2.

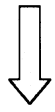


入院患者の製剤使用状況

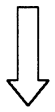
Doses of Administration : Hemophilia B



製剤	患者数 (人)	総使用量 (U)	1人使用量 (U)
F. VIII製剤	S54	342,100	20,124
	S55	1,058,100	81,392
	S56	94,700	18,940
	S57	13,000	2,167
F. IX製剤	S54	42,800	10,700
	S55	100,800	25,200
	S56	7,000	3,500
	S57	12,400	6,200



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



私達の教室では,昭和 57 年 12 月より家庭療法を開始致しました。家庭療法普及につれ,濃縮製剤・総使用量,1 人使用量,1 回使用量,受診回数等がどのように変化するか比較のため昭和 54 - 57 年の過去 4 年間における外来・入院患者使用状況をまとめてみました。あわせて当院における各関節出血に対する投与量を表示しました。